

- 1 日 時 令和 7 年 2 月 26 日（水） 19：00～20：30
2 場 所 長崎市役所 15 階中会議室（長崎市魚の町 4-1）
3 議 題

報告

- ・ 事前送付資料／（資料 1）（参考資料 1）（参考資料 2）について
- ・ 意見集約（事前提出）／（別紙 1）（別紙 2）（別紙 3）（別紙 4）について

協議

- （1）各施設における ACP の現状と課題について（共有）
- （2）ACP の課題に応じた対応策・取組みの検討

4 配布資料

（1）事前送付資料①

資料 1） R 6 医療・介護連携部会（施設 ACP 検討部門）資料

資料 2） R 6 課題と対応策

参考資料 1） R 5 部会ワーキング＊元気なうちから手帳について

参考資料 2）【施設抜粋＊自由記載】在宅医療・介護連携実態調査

事前送付資料②

別紙 1） 修正版資料 2「施設における ACP」についての意見・課題

別紙 2） 修正版資料 2「施設における ACP」についての対応策・取組み

別紙 3） 施設側意見「R6 課題と対応策（施設における ACP に取り組むうえでの課題）」

別紙 4） 支援者側意見「R6 課題と対応策（施設における ACP に取り組むうえでの課題）」
式次第

（2）当日配布資料

座席表

5 委員及び事務局の発言内容等

—議事開始—

【事務局】

- 事務局による開会の挨拶
- 委員紹介
- 事務局紹介
- 資料確認

—報告：（資料 1）（参考資料 1）（参考資料 2）（別紙 1）（別紙 2）（別紙 3）（別紙 4）について（説明）—

【事務局より】

- 資料に基づき説明

—協議（1）各施設における ACP の現状と課題について（共有）—

【事務局より】

○各施設における ACP の現状や最も課題だと思われる点について共有をお願いしたい

【特別養護老人ホーム】

（現状）

- ・施設においては、「看取り期にどうしますか」という話し合いは行っている。
- ・施設として、入居時の介護度が要介護 4 や要介護 5 の方が多く、自身での意思決定が困難な方も多い。

（課題）

- ・介護人材の不足により外国人スタッフを採用するなどの対応をとっているが、入居者の状態として見守りの頻度が増えたりすると、少人数での対応となり、ACP に取り組むことが難しい状況もある。
- ・ACP についてご家族が理解されていないケースもある。

【認知症グループホーム】

（現状）

- ・入居時に今後の希望について“参考程度に”として確認している。
- ・ACP を行う際の所定の様式はなく、これまで生活されてきた生活歴を家族に記入してもらいコミュニケーションのきっかけにしたり、何を希望されているのかというところは家族に確認をしている状況。
- ・施設として実際に医療行為ができないため、主治医の裁量によって看取りができる施設、できない施設に大きく分かれ、ご家族が看取りを希望されたとしても物理的にできないと判断されることもある。
- ・人手不足であり、施設での看取りを希望されたとしても対応できないケースもある。

（課題）

- ・入居者の状態として、認知症が進行している状況であり実際はご家族の希望となってしまうため、ACP 自体を我々はどう捉えたらいいのか悩むところがある。
- ・入居される際に一からアセスメントを行いケアプランを作成している状況もあり、在宅から施設の繋ぎとしては分断されている。
- ・『元気なうちから手帳』を施設として、どういうふうに取り扱っていけばいいのか。生活歴が大事、これまでのその方の物語が大事、ということは理解しているが、入居されている方は直近の記憶からどんどん無くなっていくので、ACP となったときに、どこをどう切り取って施設として受けたらいいのか。終活に向けてのところだけではないと思うが、『元気なうちから手帳』をどのように活かしたらいいのか。職員によって捉え方もあると思う。

【老人保健施設】

（現状）

- ・施設として中間施設ではあるが、色々な類型があり、超強化型がある一方で看取りに対応する施設もある。看取りを希望された場合は、当然話し合いをしている。
- ・話し合いの際の特定の書式はなく、施設それぞれのもを活用していると思われる。
- ・入所者の状態として、それなりに重度の方ばかりであり、入所のタイミングでご家族の方と話しをするのがほとんどだと思う。本人自身の意思決定はできない方のほうが多い。

(課題)

- ・病気をお持ちの方に今後のこと（ACP＝死の話ではないが、最終的に死に関する話にもなるので…）の話しをすることはすごく難しいのではないか（死が迫った方に直接聞くのはかえって不安を大きくする可能性もある。不安を感じる人の方がおそらく多いと思う。）
- ・自身で判断できない方については家族に確認するしかない。

【訪問介護】

(現状)

- ・お元気な方は、ACP に慣れていない、“まだ元気だから”という気持ちもあるようだが、入院が必要となり、入院して在宅に戻った際に、不安を感じていたりするので、そのタイミングで想いを確認することもある。
- ・人手不足であり、意思確認を行うのも手一杯という状況もある。

(課題)

- ・実際の支援員の方々が、“ACP について知らない”という方もいて、認知度がまだ低い。

【介護支援専門員】

(現状)

- ・ケアマネジャーとしては、研修に参加することが多いので、ACP に関しては割と周知ができている状況ではないかと思われる。
- ・実際に、少し認知症の症状がある状況の方に ACP を行うと、不穏になったり、不安になって眠れなかったりしたので、すればするほど難しいなという思いがある。
- ・信頼関係を持ちながらでないと、『元気なうちから手帳』も埋まらないので難しさはある。

(課題)

- ・『元気なうちから手帳』を書いたとしても次の段階でどういう場面で使うのか。たくさんの範囲があるなかでどこに絞って話をする（共有する）、伝えたらいいのか。それぞれの施設でも違うと思うし、どこでどう、どの場面で活かしていくか。場面のイメージを持たなければいけない。

【訪問看護】

(現状)

- ・日頃から、介護士と関わることが多い。看護師などの医療従事者は、結構研修があるので、ACP はすんなり頭に入ってくるところがあるが、介護士やヘルパーはまだまだ ACP についての知識や受け入れが薄いと感じることもある。施設に入所する前（在宅）で『元気なうちから手帳』を活用したいという気持ちはあるが、なかなか、初めて会った人に「人生どう生きてきたのですか」と聞くのは少し難しい部分もある。正直、看護師が聞いていいのか、医師から切り出した方がいいのではないかなど、本人の状態によっても変わってくると思うので、すごく難しいなというのが現場の意見なのかなと思う。

—協議（2）ACPの課題に応じた対応策・取組みの検討（元気なうちから手帳の活用など）—

【事務局より】

○各施設の現状や課題を踏まえて、施設で共通した取組みができないかと悩んでいる。

書式の統一に限らずとも、ACPについて触れるタイミング等（例えば、入所相談時に触れるなど）も含めて取組みに関してご意見をいただきたい。

【特別養護老人ホーム】

ACPの課題に応じた対応策・取組み

- ・入居前の段階で、よく話し合っていたほうが良いと思う。
- ・施設に入る前の段階で、現在の取組みを強化していけば、理解される方がだんだん増えてくるのではないかな。
- ・統一の書式で、想いを聞いたり聞かなかったりするのではなく、入居者全員に対して ACP について触れる。
- ・ACP について、若い人が自ら進んで何かしたくなるような働きかけが必要ではないかな。

元気なうちから手帳の活用

- ・『元気なうちから手帳』については、施設に必要なところだけをすれば良いと思う。
- ・施設申込みの際に、“『元気なうちから手帳』を持っていくこと”と市役所が決めるのはどうか。

【認知症グループホーム】

ACPの課題に応じた対応策・取組み

- ・施設としては、書式があった方がわかりやすい。（書式を基にアセスメントを取って家族と話し合いをしていると思うので）

元気なうちから手帳の活用

- ・後期高齢者の保険証を渡すときに、『元気なうちから手帳』を渡す。母子手帳のように配付するといったかたちであれば、受け入れやすくなる部分もあるのではないかな。
- ・取組みとしてはすごくいいことだと思うので、進めていく価値はあると思う。『元気なうちから手帳』には、生活歴や色々な重要ポイントとなるフォーマットが入っているので現場では活かしやすいと思う。手帳のネーミングなど受け入れやすいような状況にしていく等、様々な課題があるだろうが。いざ入居されるときに手帳が真っ白で、書いてもらいます、みたいなやりとりをしないといけない方もいるだろうし、色々なフェーズがあるのかなと思う。

【老人保健施設】

ACPの課題に応じた対応策・取組み

- ・ACP に関しては、若い人たちにどんどん普及啓発をしていく必要がある。現場では、ACP もだが、DNAR にもしっかりと触れる必要がある。医療職は、「死」について触れる機会が日常にあるが、「家族が亡くなる」というのは非日常なことであり、不安に感じる人のほうが多いと思う。死が迫った人に今後のことを直接聞くのはかえって不安を大きくする可能性もある。人生会議では早い段階、若いときから「自分の死」というのをあらかじめ考えることも必要。人生会議のステージによって考え方を変えていく必要があるかなと思う。

【医師会】

ACP の課題に応じた対応策・取組み

- ・施設によってはもうすでに入所の時点で、書き込めない状況にあるという話だったので、もっと早い段階で ACP について話をして内容を施設に持っていったらいいなと。施設の人が〇〇さんこういうふうにお考えなのですねっていうのを繰り返し話し合えるようになっていけたらいいなと思う。

元気なうちから手帳の活用

- ・講演をよくしているが、『元気なうちから手帳』を紹介するときが一番大切なところとして、“本人が大切にしているもの” “本人の物語” “小さいころから年代別に自分の歴史を書くところ” 書けない人も多いけど、患者さん、利用者さんから思い聞かなくていう部分では、過去どうだったかを聞くのが一番大事。
あまり医療行為をどうするのかというところは聞いてない。医療行為はその場その場ですごく変わるので、点滴する/しないも、その辺は医者判断も多いのであまり詳しい医療行為のところは聞いていない。
どちらかというと、“大切にしているもの” とか、“物語” とか、“これからどうしたいか” という部分にポイントを置いて聞いている。狭義の ACP と広義の ACP と言うが、狭義の ACP の部分：最期のときにどうするかというところは変わるので、元気なときは触れなくてもいいかなと思うところもある。
- ・介護保険申請のときに『元気なうちから手帳』に書いてもらうのもありかなと思う。

【訪問介護】

ACP の課題に応じた対応策・取組み

- ・コミュニケーションのなかで、気づく部分もあるので、その部分をいかに付け加えというか、サービス担当者会議の場面等と言えるきっかけにできるか。サービス担当者会議のときは、サービス内容のことばかりで、ACP に関する話を話しかけることがないため、そのような場面で徐々に広げていき、今後どうしたいのかどうしていくべきなのかという話やそのためにはこうしたら良いよね、というかたちの提案に繋がながら、施設に入る前の段階から始めていき、うまく施設の方に繋がっていったらいいのかなと思う。

【介護支援専門員】

ACP の課題に応じた対応策・取組み

- ・若い人や元気な方たちへ広義の ACP というかたちで周知していく、理解してもらう。医学部・看護学部・薬学部などの大学で講義をしているが、自分の親やおじいちゃんおばあちゃんなど、状況に結びつけて深く情報が入っていく。医療関係の学生は ACP についてすごく勉強されていて、結びついてストンと入っていくので、私たちのような専門職に繋がっていく人へのアプローチだと入り込みやすいかもしれない。

元気なうちから手帳の活用

- ・専門職でなくても、家族から言われたら素直に手帳に記入できるかもしれない。
- ・施設でも居宅でもそうだが、手帳の一番初めのところ：例えば“好きな色”とか、“生活歴”とかその人らしさや生きてきた経過、好きなことというのは、どんな状態になっても変わらないものとして見たい。
認知症で好きな色が分からなくなっても、赤が好きだったと知ったら、赤を提供することも施設ではできると思う。在宅でもそうだと思う。状態によって意向は変化するが、その人らしさの部分は共通していて、手帳の内容として使いたい、欲しい情報。ケアマネジャーとして 23 項目のアセスメントには、『元気なうちから手帳』にあるような好きな色とか好きな花の情報はないが、その部分が一番大事だったと思う。

【訪問看護】

ACP の課題に応じた対応策・取組み

- ・県や市による研修も、看護職にはたくさん実施されているが、介護士等に対する ACP の研修は少ないのではないかと。これから研修をやっていくのも一つの手ではないかと思う。

元気なうちから手帳の活用

- ・手帳を書いてください、というよりも、市民に対しての反響が多いのであれば市民向けの研修をしっかりと地道にやっていくことで、手帳を持っている市民や記入している市民が増えるきっかけにもなると思う。時間をかけてやっていくしかないのかなと思う。

【包括ケアまちなかラウンジ】

元気なうちから手帳の活用

- ・『元気なうちから手帳』は“その人らしく生きる”、亡くなることについてではなく、生きるためのノートだと思う。その人を知るための方法の一つのきっかけにできるもの。もう一つの役割として、入所時の意向確認に使えるものだと思う。“どう生きるのか”ということと“どう希望されるのか”、その両方に使えるのがこの『元気なうちから手帳』なのかなと思う。
- ・新たに、施設ごとに使いやすいものを作るというのも一つの方法かもしれないが、『元気なうちから手帳』は今あるツールとしては非常に優秀な使いやすいものだと思う。

—研修について—

【事務局より】

- 普及啓発の一つとして研修の実施という意見もあったが、施設職員向けの研修方法についてご意見をいただきたい。

【特別養護老人ホーム】

- ・介護士を一括りにしてほしくない。ヘルパーでの看取りは多分ない。デイサービスも幅広い。認知症デイサービスもあれば、運動するようなデイサービスもあり、ACP は全く頭にないと思う。そこで介護職に研修をする意味があるのかというふうに思う。対象者自身に何とか元気になってもらい在宅に、下手したら自立に戻ってもらうぐらいの想いでやっているのならば、そちらに特化してもらった方がいいのではないかなと思う。介護職員という一括りの中で全部を片付けられてしまうと、デイサービスの介護職員と施設の介護職員でやっていることは違うから。施設では取り組んでいったほうがいいと思うが、デイサービスで研修の実施が必要なのかと言われたら、いらないのではないかなと思うが。

【認知症グループホーム】

- ・研修を主催する方や時間外に研修参加される方は割と前のめりの方で学習意欲が高い。どんどん知識を吸収して現場に活かしていこうという方がいる一方で、そうでない方もいる。施設として実際に満足のいく研修ができているかというところではない。法定研修以外にも、新人研修、中堅研修、管理職研修、マネジメント研修、BCP など、次々に県や国、市から研修してくれと年々増えている。勤務時間は 170 時間しかない。170 時間のなかで、介護もしないといけない、業務もしないといけない、研修もしないといけない、となる

とはっきり言ってパンクしそうな感じ。いやもうしている、現場は。

一方で知識を入れることは大事なので、そのような状況でもなんとか研修を開いて法定研修を消化しているという状況。実際に現場で活かせるような技術や知識は自分で勉強してほしい、みたいになってしまう。

- ・ ACP に関しても重要だと思う。研修のカリキュラムを県や市の方が先導して作っていただいて。要は、長崎県で働く介護職が“初任者はどこを目指せばいいのか”“中堅になったらどれぐらいの知識を身につけておかなければいけないのか”というような指標を作ってもらい介護職が乗かって日々勉強をしていく、知識をつけていく、ということをしていかないといけないと思う。効率的に研修をしていかないで自前で研修を用意して自分たちのレベルで研修をして、レポートを書いてというかたちでは、実際に技量を問われたときに胸張って一定のレベルが保っているのかというと、施設によって違ってくるのかなと思う。
- ・ まちなかラウンジからも研修の案内はあるし、社協からもある。重要なのは分かる。受けないといけない。前のめりの人は受ける。でもそうでない人が大半なので、やる気が後ろ向きのような人に対しても、しっかりと知識を入れて仕事をしてもらわないといけないという課題があるため、ACP に関してはその点をどうにかしないといけないと思う。
- ・ 日常にしていっての方がいいと思う。例えば Y o u T u b e など動画が視聴できる等、そのようなところから入ってもらって。大まかな研修に興味を持っていただくとか。出前研修も時間が取れずに厳しい。介護職の方たちは女性が多いので、帰って家のこともしないとイケないと言われたら研修ができない、となってしまう。“ACP”という言葉聞いたことがないという介護職の方がほとんどだと思うので、とにかく馴染んでもらうということが大事かなと思う。

【介護支援専門員】

- ・ ケアマネジャーも法定研修は本当に大変な状況の中で受けないといけない。看護協会などは、生涯学習という段階的なもので、そのようにやっていくことはとても大変。本当は必要なのに、実際は人手不足で受ける時間が取れず、受けられないというところはごもつともだなというふうと思う。
- ・ ACP について、施設が受け入れられる状況をつくるためにも県のリーダー研修などを通して、“自施設の考えを持っておく”、という意識を持つのは大事だと思う。

【訪問看護】

- ・ 人材不足が研修への参加を妨げている部分もある。例えば BCP の勉強会を施設で実施しないといけない、という特例があるように、“ACP も何か施設で勉強会してください”というようなものがあれば、積極的に取り組むことができるのかなと思う。

【包括ケアまちなかラウンジ】

- ・ お元気な方に対する『元気なうちから手帳』の活用の仕方ということで、12 月にまちなかラウンジで研修会を実施した。地域内で、元気な人に手帳を普及して下さっている病院があって紹介してもらった。手帳をもらった人は、「こんなのを早く知りたかった」と言っている人がほとんどだった。
- ・ まちなかラウンジとしては、地域住民の方々に人生会議の研修会を地域包括支援センターと協働で実施している。地域のエリアに私達が出向き『元気なうちから手帳』がどうして必要なのかというところから説明をさせていただいている。他にも、もしバナゲームを実施しその場で一緒に手帳に記入をするという内容の講座も行っており、多いときは 30 人程度の参加がある。元気な人こそ必要な ACP なのかなと思っていると

ころ。

- ・地域の方々に地道な普及活動を幅広くしていくことが一つと、今施設にいらっしゃる方や在宅で療養していて寝たきりになってあまり時間がないような方に対しての両方から ACP を進めていかないといけない。“これ知らなかった”で終わってしまうような方をできるだけ少なくしていかないといけないのが私たちの取り組みなのかなと日々感じている。今後もそういう普及活動がどのような人にも大事なのかなと思いながら頑張っているところ。
- ・介護士の方々も研修会には結構参加してくださっている。『元気なうちから手帳の活用事例』や『看取りの事例発表』について、つい先日まちなかラウンジで研修を実施したが、参加者のうちほとんどの方が施設で働いている介護士だった。『看取りの事例発表』に関して言うならば、講師として発表していただいた方は、2 人とも介護士の方が事例発表をしてくれた。とても頑張ってくださっていると思っている。積極的に研修会にも参加していただきたいし、ACP も進んでやっていただけたら嬉しいなと思っている。
- ・ぜひ職員の方々と、ACP について普及、勉強したいということがあれば、まちなかラウンジから、施設に出向くこともできるので声をかけてほしい。今実際に地域でやっているような内容を少しでも取り組んでいただければ簡単に ACP のことが理解できるのではないかなと思う。

その他意見なし

—議事終了—